

病虫害発生予察情報

- 1 令和 7 年度 病虫害発生予察 予報第 4 号（7 月）
2 気 象 情 報 九州北部地方 1 か月予報（福岡管区气象台）
气象台メモ（大分地方气象台）

向こう 1 か月間における農作物の主な病虫害の発生動向は、次のように予想されます。

◎予報内容の概況

作物	病虫害名	発生		面積		発生量		ページ数
		平	年	比	前	年	比	
水 稲	いもち病（葉）	平	年	並	前	年	並	P.2
	いもち病（穂）	平	年	並	前	年	並	P.2
	白葉枯病	平	年	並	前	年	並	P.3
	紋枯病	平	年	並	前	年	並	P.3
	セジロウンカ	平	年	並	前	年	並	P.4
	トビイロウンカ	平	年	並	前	年	並	P.4
	コブノメイガ	平	年	並	前	年	並	-
温州ミカン	斑点米カメムシ類	や	や	多い	や	や	多い	P.5
	そうか病	平	年	並	や	や	少ない	P.5
	黒点病	平	年	並	前	年	並	P.6
カボス	ミカンハダニ	や	や	少ない	や	や	少ない	P.6
	かいよう病	や	や	少ない	前	年	並	P.7
	黒ミカンハダニ	平	年	並	前	年	並	P.7
ブドウ	ベと病	や	や	少ない	前	年	並	P.8
	ナシ	平	年	並	前	年	並	P.8
果樹共通	黒ハダニ	や	や	少ない	前	年	並	P.9
	果樹カメムシ類	や	や	少ない	前	年	並	P.9
夏秋トマト	すずかび病	や	や	少ない	前	年	並	P.10
	灰褐色かび病	平	年	並	前	年	並	P.10
	うどんこ病	平	年	並	前	年	並	-
	コナジラミ類	平	年	並	前	年	並	P.11
	ハモグリバエ類	平	年	並	前	年	並	P.12
夏秋ピーマン	オオタバコガ	平	年	並	前	年	並	-
	斑点病	や	や	多い	多	な	い	P.13
	うどんこ病	や	や	少ない	前	年	並	P.14
	アブラムシ類	平	年	並	少	な	い	P.15
	アザミウマ類	多	な	い	や	や	多い	P.16
白ネギ （平坦地）	タバコガ	少	な	い	前	年	並	-
	ネギアザミウマ	や	や	多い	前	年	並	P.17
	ネギハモグリバエ	や	や	多い	多	な	い	P.17
	シロイチモジヨトウ	平	年	並	多	な	い	P.18
白ネギ （中山間地）	ベと病	や	や	少ない	少	な	い	P.19
	ネギアザミウマ	平	年	並	や	や	少ない	P.19
	ネギハモグリバエ	や	や	少ない	多	な	い	P.20
	ネギコガ	や	や	少ない	前	年	並	-

◎注意事項 上記一覧表病虫害のゴシック体のみ以下に個別の記述をしています。

◎特記事項 令和 7 年度病虫害防除技術情報第 2 号（ピーマン 斑点病）：令和 7 年 5 月 27 日
令和 7 年度病虫害防除技術情報第 3 号（トマト トマトキバガ）：令和 7 年 6 月 4 日
令和 7 年度病虫害発生予察注意報第 1 号（ピーマン アザミウマ類）：令和 7 年 7 月 1 日
令和 7 年度病虫害防除技術情報第 4 号（白ネギ ネギアザミウマ）：令和 7 年 7 月 1 日

水 稲

1 いもち病

(1) 予報内容

	[葉いもち]	[穂いもち]
発生地域：	県内全域	早期水稻栽培地域
発生面積：	平年並	平年並
発 生 量：	平年並	平年並

(2) 予報根拠

ア 6月中旬の巡回調査では、早期水稻において発生は確認されず、発生圃場率、平均発病度ともに平年より低かった。普通期水稻の調査可能な11圃場において発生は確認されなかった。

早期水稻における発生状況

発 生 圃 場 率：本年 0%（平年 13.0%、前年 10.0%）

平均 発 病 度：本年 0 （平年 1.4 、前年 0.1 ）

イ 本病は低温寡照条件で発生が増加するが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は低い確率10%、平年並10%、日照時間は低い確率20%、平年並30%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 葉いもちは早期発見、早期防除に努める。

イ 6月1日～6月22日の期間におけるBLASTAMによる各アメダス観測地点での葉いもち感染好適条件の発生は以下のとおりであった。

院内	6/9、6/12、6/15、6/16	竹田	6/12、6/14、6/17
日田	6/9、6/12、6/15	佐伯	6/9、6/10、6/12、6/14、6/16
玖珠	6/12、6/14、6/15	宇目	6/12、6/14、6/16

ウ 本田におかれた補植用の苗は、本病の伝染源となるので速やかに取り除くようにする。

エ 普通作水稻で苗箱施薬を行っていない圃場では、粒剤による葉いもちの予防に努める。

オ 葉いもちが多発した圃場では追肥の窒素施肥量を控える。

カ 穂いもちの防除は、穂ばらみ期と穂揃期の2回防除を基本とする。

キ 出穂後も曇雨天が続くなど穂いもちの多発が予測される場合は、穂揃期の7～10日後に追加防除を行う。

ク 降雨が続く場合でも雨天の間隙をねらった防除を行い、防除適期を失わないようにする。

ケ 水稻いもち病防除に対するQoI剤（ストロビルリン系殺菌剤）については、令和4年度に本剤耐性菌の発生が確認されているため、引き続き耐性菌の再発や拡散を防ぐことが重要である。そこで、やむを得ず水稻（WC Sも含む）に使用する場合は、「水稻にQoI剤を使用する場合の対応マニュアル（平成28年11月10日付地域農業振興課、JA全農おおいの公表（URL: https://www.pref.oita.jp/uploaded/life/2213301_4504493_misc.pdf））」に準じた使用を行う。

2 白葉枯病

(1) 予報内容

発生地域：常習発生地

発生時期：平年並

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 6月中旬の巡回調査では、早期水稻において発生は確認されず、発生圃場率、平均発病度ともに平年より低かった。普通期水稻の調査可能な11圃場では発生は確認されなかった。

早期水稻における発生状況

発生圃場率：本年 0% (平年 2.3%、前年 0%)

平均発病度：本年 0 (平年 0.02、前年 0)

イ 本病は浸冠水することで発生が助長される。向こう1か月の気象予報によれば、降水量は平年並30%、多い確率20%と予想されている(気象情報参照)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本田での浸冠水防止に努める。

イ 常習発生地では、本田でのプロペナゾール粒剤(FRAC:P02(P2))による予防散布を徹底する。

3 紋枯病

(1) 予報内容

発生時期：平年並

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 6月中旬の巡回調査では、早期水稻において発生は確認されず、発生圃場率、平均発病度ともに平年並であった。普通期水稻の調査可能な11圃場において発生は確認されなかった。

早期水稻における発生状況

発生圃場率：本年 0% (平年 0%、前年 0%)

平均発病度：本年 0 (平年 0、前年 0)

イ 本病は高温多湿条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は平年並10%、高い確率80%、降水量は平年並30%、多い確率20%と予想されている(気象情報参照)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 株元の高温多湿は本病の発生を助長するので、過繁茂にならないよう適切な肥培管理に努める。

イ 初発が早い圃場や蔓延が急速な圃場では早めの防除を実施する。

ウ 早期水稻では出穂期までに防除を行う。

4 セジロウンカ

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

- ア 6月中旬の巡回調査では、早期水稲において10圃場中6圃場で微発生が認められ、発生圃場率、株あたり虫数ともに平年より低かった。普通期水稲において調査可能な11圃場中1圃場で「少」発生が確認された。

早期水稲における発生状況

発生圃場率：本年 0 % (平年 14.3%、前年 10.0 %)

株あたり虫数：本年 0.07 頭 (平年 0.4 頭、前年 0.32 頭)

- イ 6月17日現在、予察灯(60w 白熱球)においては確認されていない。(平年：7月8日)

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 本年は九州北部の梅雨入りが6月8日で平年(6月4日)より4日遅かった。九州の他県においては5月と6月に予察灯等で本種が確認され、本県でも6月の巡回調査において早期水稲と普通期水稲で確認されている。梅雨期には、前線を伴った低気圧が朝鮮半島南部付近を東進することに伴い、中国大陆から九州にかけて、南西の強風が吹走することでまとまった飛来があるので、圃場を観察し発生に注意する。圃場における発生が著しく多い場合には防除を行う。

5 トビイロウンカ

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

- ア 6月中旬の巡回調査では、早期水稲において発生は確認されず、発生圃場率、株当たり虫数ともに平年より低かった。普通期水稲において調査可能な11圃場では発生が確認されなかった。

早期水稲における発生状況

発生圃場率：本年 0% (平年 5.0 %、前年 10.0 %)

株あたり虫数：本年 0 頭 (平年 0.12 頭、前年 0.25 頭)

- イ 6月15日に予察灯(60w 白熱球)において雌1頭の初誘殺が確認された。(平年：8月3日)

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 本年は九州北部の梅雨入りが6月8日で平年(6月4日)より4日遅かった。しかし、本県においては平年(8月3日)より早く6月15日に初飛来が確認されており、九州の他県においても6月中旬に予察灯等において本種が確認されている。今後も前線を伴った低気圧が朝鮮半島南部付近を東進することに伴い、中国大陆から九州にかけて、南西の強風が吹走することでまとまった飛来があるので、圃場を観察し発生に注意する。

6 斑点米カメムシ類

(1) 予報内容

発生地域：早期水稻栽培地域

発生面積：やや多い

発生量：やや多い

(2) 予報根拠

ア 6月中旬に畦畔において実施したすくい取り調査では、クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシ類が捕獲され、平均捕獲数は平年より多かった。

平均捕獲数（合計）： 6.5 頭（平年： 2.4 頭、前年： 1.7 頭）

イ 早期水稻地域に、斑点米カメムシの生息地となる雑草が繁茂している畦畔が散見された。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 防除は穂揃期に穂いもちと同時防除を広域で一斉に行う。

イ 穂揃期とその7～10日後の2回、発生が多い場合はカメムシ対策として3回目の散布も行う。

ウ イネカメムシは出穂前から圃場に侵入するので、本種の発生が確認されている地域では、防除効果の高い出穂直後に1回目の農薬散布を行う。また、周辺の圃場より出穂が早いイネに多発している場合があるので、圃場をよく観察し防除を徹底する。

エ イネ科雑草の多い畦畔や休耕田に隣接した圃場では成虫の飛来を受けやすいため、草刈りの時期を防除直前にするなど工夫する。

カンキツ（温州ミカン）

1 そうか病

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 6月中旬の巡回調査では、葉の発生圃場率、平均発病葉率ともに平年並であり、平均発病度は平年よりやや高かった。幼果の発生圃場率は平年より高く、平均発病果率、平均発病度ともに平年よりやや高かった。

（葉） 発生圃場率：本年 10.0%（平年 9.0%、前年 30.0%）

平均発病葉率：本年 1.1%（平年 1.1%、前年 3.0%）

平均発病度：本年 0.4（平年 0.3、前年 0.7）

（幼果）発生圃場率：本年 20.0%（平年 5.0%、前年 10.0%）

平均発病果率：本年 1.7%（平年 1.4%、前年 0.2%）

平均発病度：本年 0.7（平年 0.5、前年 0.0）

イ 本病は降雨により発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、降水量は、平年並30%、多い確率20%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 7月以降は発生が少なくなるが、多発園では伝染源となる被害葉、被害果の除去を徹底する。

2 黒点病

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 6月中旬の巡回調査では発生は認められず、発生圃場率、平均発病果率、平均発病度ともに平年より低かった。

(幼果) 発生圃場率：本年 0% (平年 3.0%、前年 0%)

平均発病果率：本年 0% (平年 0.3%、前年 0%)

平均発病度：本年 0 (平年 0.1、前年 0)

イ 本病は降雨により発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、降水量は、平年並30%、多い確率20%と予想されている(気象情報参照)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 梅雨期の定期的な予防散布を徹底する(降雨量200~250mmごと)。圃場に簡易な雨量計を設置する。ただし、降雨が少ない場合でも、1ヶ月に1回予防を行う。

イ 伝染源である枯れ枝の剪定徹底に努める。

3 ミカンハダニ

(1) 予報内容

発生面積：やや少ない

発生量：やや少ない

(2) 予報根拠

ア 6月中旬の巡回調査では、発生圃場率、平均寄生葉率ともに平年より低かった。

発生圃場率：本年 10.0% (平年 25.2%、前年 20.0%)

平均寄生葉率：本年 1.1% (平年 3.7%、前年 3.5%)

イ 本虫は高温乾燥条件により発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並10%、高い確率80%、降水量は、少ない確率50%、平年並30%と予想されている(気象情報参照)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生に注意し、初期防除を徹底する。

イ 抵抗性の出現を回避するため、同一系統の薬剤は年1回の使用とする。

カンキツ（カボス）

1 かいよう病

（1）予報内容

発生面積：やや少ない

発生量：平年並

（2）予報根拠

ア 6月中旬の巡回調査では、微発生が1圃場、「少」発生が1圃場で確認された。葉の発生圃場率は平年並、平均発病葉率は平年より低く、平均発病度は平年並であった。幼果の発生圃場率、平均発病果率、平均発病度ともに平年並であった。

（葉） 発生圃場率：本年 11.1%（平年 10.0%、前年 11.1%）

平均発病葉率：本年 1.2%（平年 2.2%、前年 0.6%）

平均発病度：本年 0.2（平年 0.3、前年 0.3）

（幼果）発生圃場率：本年 0%（平年 0%、前年 0%）

平均発病果率：本年 0%（平年 0%、前年 0%）

平均発病度：本年 0（平年 0、前年 0）

イ 本病は降雨により発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、降水量は、平年並30%、多い確率20%と予想されている（気象情報参照）。

（3）防除上注意すべき事項

ア 梅雨期の予防散布を徹底する。

イ 罹病枝葉の剪除を徹底する。

2 黒点病

（1）予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

（2）予報根拠

ア 6月中旬の巡回調査では、発生圃場率は平年より低く、平均発病果率、平均発病度はともに平年より高かった。

（幼果）発生圃場率：本年 0%（平年 2.6%、前年 0%）

平均発病果率：本年 0.4%（平年 0.3%、前年 0%）

平均発病度：本年 0.1（平年 0.1、前年 0）

イ 本病は降雨により発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、降水量は、平年並30%、多い確率20%と予想されている（気象情報参照）。

（3）防除上注意すべき事項

温州ミカンの項を参照

3 ミカンハダニ

(1) 予報内容

発生面積：やや少ない

発生量：やや少ない

(2) 予報根拠

ア 6月中旬の巡回調査では、発生圃場率、平均寄生葉率ともに平年より低かった。

(葉) 発生圃場率：本年 0 % (平年 40.0%、前年 33.3%)

平均寄生葉率：本年 0.1% (平年 7.6%、前年 2.9%)

イ 本虫は高温乾燥条件により発生が助長されるが、向こう 1 か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並 10%、高い確率 80%、降水量は、少ない確率 50%、平年並 30%と予想されている (気象情報参照)。

(3) 防除上注意すべき事項

温州ミカンの項を参照

ブドウ

1 ベと病

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 6月中旬の巡回調査では、発生は認められず、発生圃場率、平均発病葉率、平均発病果率ともに平年並であった。

(葉) 発生圃場率：本年 0% (平年 0%、前年 0%)

平均発病葉率：本年 0% (平年 0%、前年 0%)

(果房) 発生圃場率：本年 0% (平年 0%、前年 0%)

平均発病房率：本年 0% (平年 0%、前年 0%)

イ 本病は降雨により発生が助長されるが、向こう 1 か月の気象予報によれば、降水量は、平年並 30%、多い確率 20%と予想されている (気象情報参照)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発病すると防除が困難となるので降雨前の予防散布を徹底する。

1 黒星病

(1) 予報内容

発生面積：やや少ない

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 6月中旬の巡回調査では発生は認められなかった。発生圃場率、平均発病葉率、平均発病果率ともに平年より低かった。

(葉) 発生圃場率：本年 0% (平年 7.8%、前年 0 %)

平均発病葉率：本年 0% (平年 0.3%、前年 0.0%)

(幼果) 発生圃場率：本年 0% (平年 1.9%、前年 0 %)

平均発病果率：本年 0% (平年 0.1%、前年 0 %)

イ 本病は低温、降雨により発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、低い確率 10%、平年並 10%、降水量は、平年並 30%、多い確率 20%と予想されている(気象予報参照)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 幸水、豊水は本病に弱いので予防散布を徹底し、かけもれのないよう十分量を散布する。

イ DMI 系薬剤 (FRAC:3) は連用すると耐性菌が出現しやすいので、年3回までの使用とする。

ウ 発病葉や発病果は伝染源となるので、速やかに圃場外に持ち出し処分する。

2 ハダニ類

(1) 予報内容

発生面積：やや少ない

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 6月中旬の巡回調査では発生は認められず、発生圃場率、平均寄生葉率ともに平年より低かった。

発生圃場率：本年 0% (平年 3.8%、前年 0 %)

平均寄生葉率：本年 0% (平年 0.1%、前年 0.0%)

イ 本病は高温乾燥条件により発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並 10%、高い確率 80%、降水量は、少ない確率 50%、平年並 30%と予想されている(気象予報参照)。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 発生に注意し、初期防除を徹底する。

イ 抵抗性の出現を回避するため、同一系統薬剤は年1回の使用とする。

果樹共通

1 果樹カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

（1）予報内容

発生面積：やや少ない

発生量：やや少ない

（2）予報根拠

ア 各地点のフェロモントラップにおける果樹カメムシ類の誘殺数は平年より少なく推移している。

イ トラップ調査では、これまでにチャバネアオカメムシが主体的に誘殺されている。

（3）防除上注意すべき事項

ア カメムシ類の園内への飛来は地域や園地により大きく異なるので、園内外をこまめに見回り早期発見に努めると共に、地域で一斉防除を行うと防除効果が高い。

イ 合成ピレスロイド系殺虫剤（IRAC：3A）の多用は、天敵等への影響が大きく、ハダニ類の発生を助長するので最小限の使用にとどめる。

夏秋トマト

1 すずかび病

（1）予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

（2）予報根拠

ア 6月中旬の巡回調査では発生は認められず、発生圃場率、平均発病葉率ともに平年より低かった。

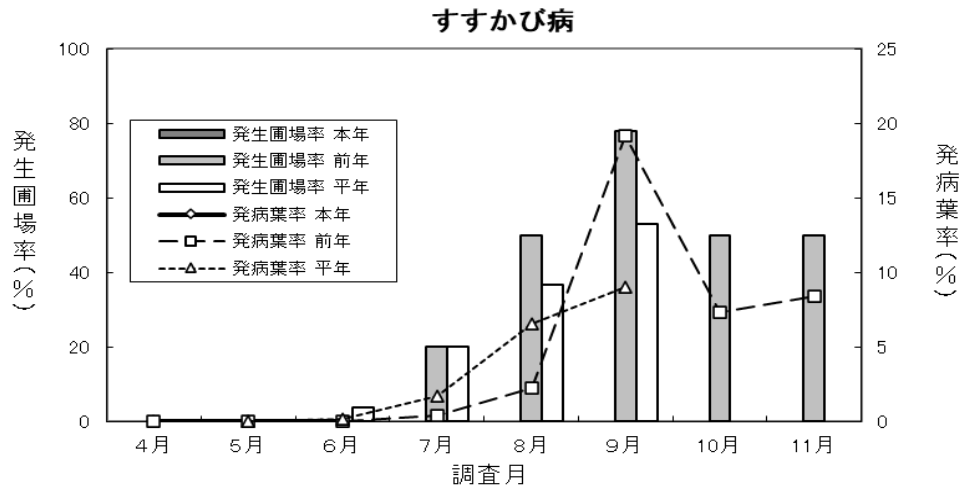
発生圃場率：0%（平年 3.8%、前年 0%）

平均発病葉率：0%（平年 0.2%、前年 0%）

イ 本病は高温多湿条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並 10%、高い確率 80%、降水量は、平年並 30%、多い確率 20%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 過繁茂、排水不良は病勢の進展を助長するので、下葉のつみ取り等を行って圃場内の風通しを良くし、初期防除を徹底する。
- イ 降雨のない時は施設内の換気を十分行い、過湿防止に努める。
- ウ 本病は草勢が低下すると多発しやすくなるので、肥培管理に留意する。



2 灰色かび病

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

- ア 6月中旬の巡回調査では発生は認められず、発生圃場率は平年よりも低く、平均発病葉率は平年並であった。

発生圃場率：0%（平年 1.0%、前年 0%）

平均発病葉率：0%（平年 0.0%、前年 0%）

- イ 本病は低温多湿条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、低い確率 10%、平年並 10%、降水量は、平年並 30%、多い確率 20%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 過繁茂、排水不良は病勢の進展を助長するので、下葉のつみ取り等を行って圃場内の風通しを良くし、初期防除を徹底する。
- イ 発病葉や発病果は伝染源となるので、速やかに圃場外に持ち出し処分する。

3 コナジラミ類

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 6月中旬の巡回調査では、微発生が3圃場確認された。発生圃場率及び平均株当虫数はともに平年より低かった。

発生圃場率：0%（平年 6.0%、前年 0%）

平均株当虫数：0.1頭（平年 1.0頭、前年 0.0頭）

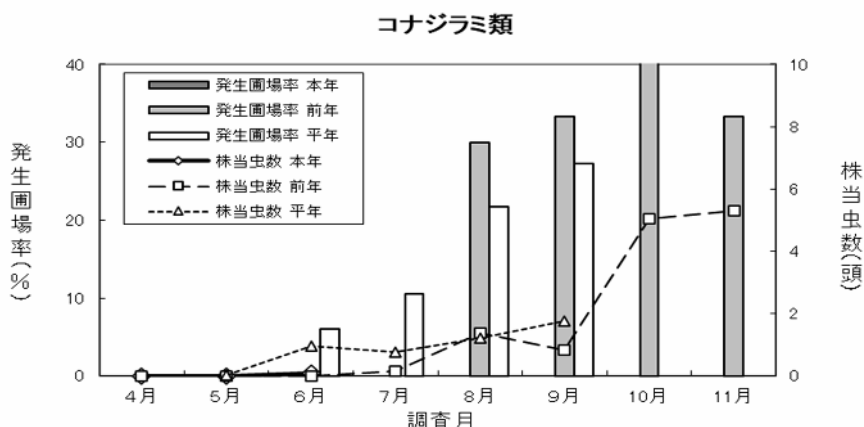
イ 本病は高温乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並 10%、高い確率 80%、降水量は、少ない確率 50%、平年並 30%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 本虫は葉裏に寄生して吸汁加害し繁殖も旺盛なため、早期発見に努め発生を認めたら直ちに防除を行う。

イ 本虫は多種の雑草にも寄生し増殖するので、圃場内外の除草を徹底する。

ウ タバココナジラミはトマト黄化葉巻ウイルス（TYLCV）を、またコナジラミ類はトマトクロロシスウイルス（ToCV）を媒介するため、粒剤による初期防除及び生育期の薬剤散布を徹底するとともに、防虫ネットなどを使用してハウス内への侵入を阻止する。



4 ハモグリバエ類

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 6月中旬の巡回調査では、微発生が1圃場確認された。発生圃場率は平年より低く、平均寄生葉率は平年並であった。

発生圃場率：0%（平年 2.5%、前年 0%）

平均寄生葉率：0.1%（平年 0.1%、前年 0.1%）

イ 本病は高温乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並 10%、高い確率 80%、降水量は、少ない確率 50%、平年並 30%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 早期発見に努め、初期防除を徹底する。
- イ 幼虫は葉肉内を潜行するため、浸達性の高い薬剤を使用する。

夏秋ピーマン

1 斑点病（令和7年5月27日 病害虫防除技術情報 第2号発表）

(1) 予報内容

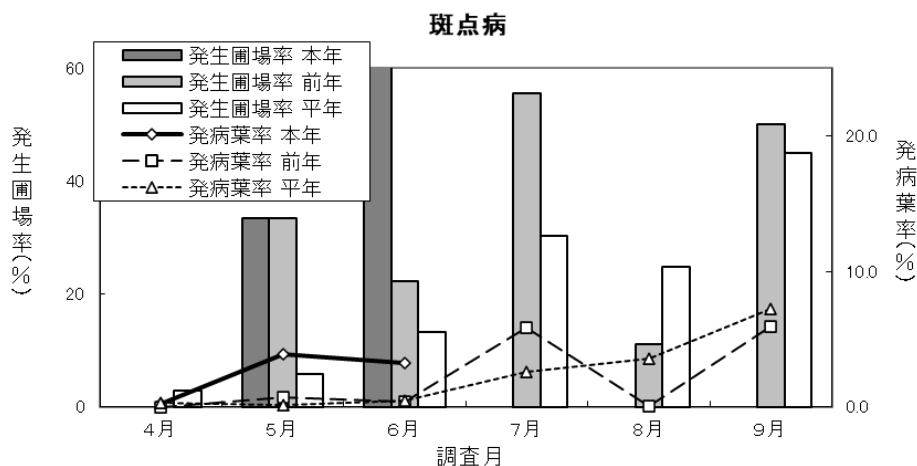
発生面積：やや多い
発生量：やや多い

(2) 予報根拠

- ア 6月中旬の巡回調査では、発生圃場率、平均発病葉率ともに平年より高かった。
発生圃場率：66.7%（平年：13.3%、前年：22.2%）
平均発病葉率：3.2%（平年：0.5%、前年：0.4%）
- イ 本病は多湿条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、降水量は、平年並30%、多い確率20%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 一旦発生すると防除が困難になるので早期発見に努め、防除は予防散布や初期散布に重点を置くとともに葉裏に十分薬剤がかかるようにする。
- イ 発病初期のうちに治療効果が高い薬剤を中心に、散布間隔を短くする等して集中的に散布する。
- ウ EBI系薬剤（FRAC：3）は連用すると耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤とのローテーション（輪番）使用を心がける。
- エ 高湿度が発生を助長するので施設では換気に努める。
- オ 本病の被害により落葉した発病葉はできるだけこまめに圃場外へ持ち出して処分する。
- カ 窒素不足等により株の樹勢が低下すると発病を助長するため、肥培管理に注意し、樹勢を維持するように心がける。



2 うどんこ病

(1) 予報内容

発生面積：やや少ない

発生量：やや少ない

(2) 予報根拠

ア 6月中旬の巡回調査では、発生は認められず、発生圃場率、平均発病度ともに平年より低かった。

発生圃場率：0%（平年：9.4%、前年：0%）

平均発病度：0（平年：0.8、前年：0）

イ 本病は乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、降水量は、少ない確率50%、平年並30%と予想されている（気象情報参照）。

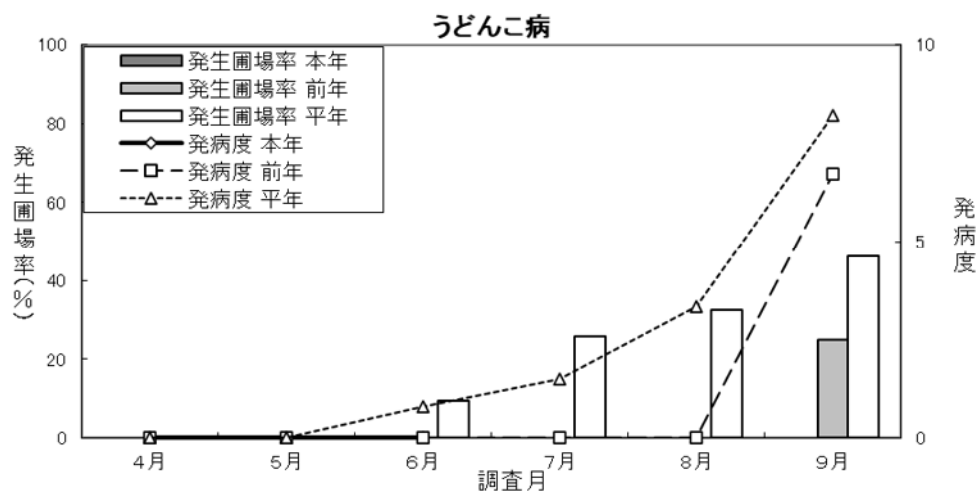
(3) 防除上注意すべき事項

ア 一旦発生すると防除が困難になるので早期発見に努め、防除は予防散布や初期散布に重点を置くとともに葉裏に十分薬剤がかかるようにする。施設栽培では硫黄粉剤50を株間散布し予防に努める。

イ 発病初期のうちに治療効果が高い薬剤を中心に、散布間隔を短くする等して集中的に散布する。

ウ EBI系薬剤（FRAC：3）は連用すると耐性菌を生じやすいので、系統の異なる薬剤とのローテーション（輪番）使用を心がける。

エ 空気の流れが停滞し、乾燥した状態で発生しやすいので、施設内では換気を図るとともに過乾燥を避ける。



3 アブラムシ類

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

(2) 予報根拠

ア 6月中旬の巡回調査では、発生圃場率は平年よりやや低く、平均50芯虫数は平年並であった。

発生圃場率：11.1%（平年：14.4%、前年：33.3%）

平均50芯虫数：1.0頭（平年：1.0頭、前年：3.7頭）

イ 本虫は高温乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並10%、高い確率80%、降水量は、少ない確率50%、平年並30%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

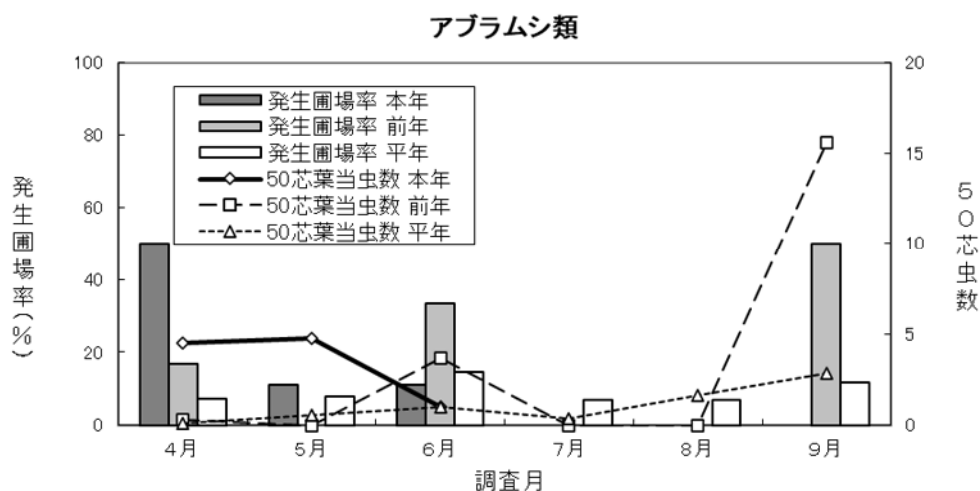
ア 本虫は成育が早く、急速に密度が高まる。また、高密度になると排泄物にすす病が発生し、果実が汚れるため低密度のうちに防除を行う。

イ 成幼虫は新芽、花卉等を吸汁加害し繁殖も旺盛なため、早期発見に努める。

ウ 同一系統薬剤を連続使用しないようにし、他系統薬剤とのローテーション（輪番）使用を行う。

エ 本虫はモザイク病（CMV、PVY、BBWV）を媒介するので発生に注意し、初期防除を徹底する。

オ ワタアブラムシのネオニコチノイド系薬剤（IRAC：4A）に対する感受性低下個体群が確認されており、本虫の防除を行う場合は発生種を確認し、効果の高い薬剤を使用する。



4 アザミウマ類（令和7年7月1日 病害虫発生予察注意報 第1号発表）

（1）予報内容

発生面積：多い

発生量：多い

（2）予報根拠

ア 6月中旬の巡回調査では、発生圃場率、平均寄生花率ともに平年より高かった。優占種はヒラズハナアザミウマであった。

発生圃場率：66.7%（平年：45.0%、前年：55.6%）

平均寄生花率：17.6%（平年：10.5%、前年：13.6%）

イ 本虫は高温乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並10%、高い確率80%、降水量は、少ない確率50%、平年並30%と予想されている（気象情報参照）。

（3）防除上注意すべき事項

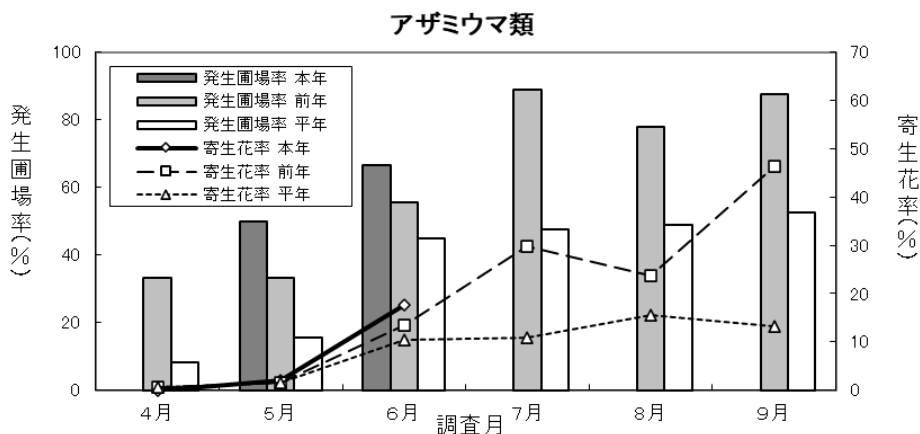
ア 本虫は葉裏、花卉、がくの内側等に潜み繁殖も旺盛なため、早期発見に努め低密度のうちに薬剤が植物体に十分かかるように防除を行う。

イ 本虫は多種の雑草にも寄生し増殖するので、圃場内外の除草を徹底する。

ウ 本虫は青色に誘引されるため、青色粘着トラップ等を設置し、発生状況の把握に努める。

エ ミカンキイロアザミウマは各種薬剤の感受性が低下しており、トマト黄化えそウイルス（TSWV）及びキク茎えそウイルス（CSNV）を媒介するので発生に注意し、初期防除を徹底する。

オ ヒラズハナアザミウマは各種薬剤の感受性が低下しており、トマト黄化えそウイルス（TSWV）を媒介するので発生に注意し初期防除を徹底する。



白ネギ（平坦地）

1 ネギアザミウマ（令和7年7月1日 病虫害防除技術情報 第4号発表）

（1）予報内容

発生面積：やや多い

発生量：平年並

（2）予報根拠

ア 6月中旬の巡回調査では、発生圃場率は100%、平均被害度は平年よりやや低かった。

発生圃場率：100%（平年：91.3%、前年：100%）

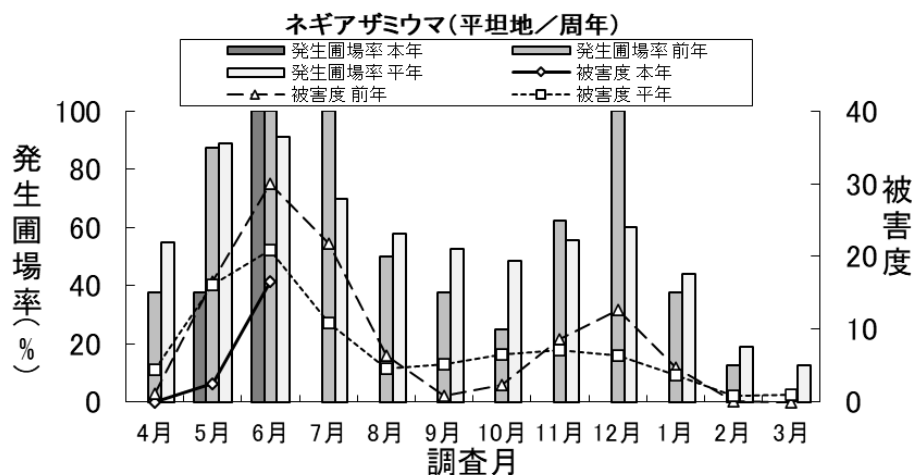
平均被害度：16.6（平年：20.9、前年：30.0）

イ 本虫は高温乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並10%、高い確率80%、降水量は、少ない確率50%、平年並30%と予想されている（気象情報参照）。

（3）防除上注意すべき事項

ア 周辺雑草が発生源となりやすいので、圃場内外の除草を徹底する。

イ 本虫の増殖力は高く、寄生密度が上昇してからでは防除が困難であるので、早期発見に努め、防除を行う。



2 ネギハモグリバエ

（1）予報内容

発生面積：やや多い

発生量：やや多い

（2）予報根拠

ア 6月中旬の巡回調査では、発生圃場率、平均被害度ともに平年より高かった。

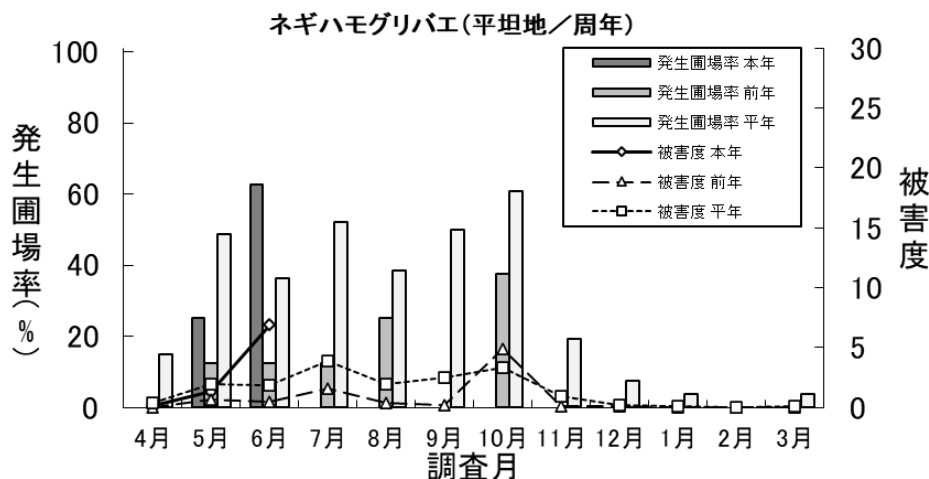
発生圃場率：62.5%（平年：36.3%、前年：12.5%）

平均被害度：6.9（平年：1.8、前年：0.5）

イ 本虫は25℃前後で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並10%、高い確率80%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 2020年に北部・豊肥地域において新たに確認されたネギハモグリバエ別系統（B系統）は従来系統と比較し1葉あたりの寄生虫数が多く、葉が白化するほど激しく食害する。両系統は形態での識別が困難なため、早期発見に努め、系統に関わらずネギハモグリバエまたはハモグリバエ類に適用のある薬剤を用い発生初期の防除を徹底する。
- イ 被害葉及び収穫残渣は本虫の発生源となるので、圃場に放置せず1か所にまとめて積み上げ、ビニールで覆い裾部分を土で埋める等適切に処分する。
- ウ 同一系統薬剤を連続使用しないようにし、他系統薬剤とのローテーション（輪番）使用を行う。



3 シロイチモジヨトウ

(1) 予報内容

発生面積：平年並

発生量：やや少ない

(2) 予報根拠

- ア 6月中旬の巡回調査では発生圃場率は平年よりやや低く、平均被害葉率は平年より低かった。

発生圃場率：12.5%（平年：16.3%、前年：0%）

平均被害葉率：0.1%（平年：0.7%、前年：0%）

- イ 本虫は高温乾燥条件で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並10%、高い確率80%、降水量は、少ない確率50%、平年並30%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 本虫は成長に伴って防除効果が低下するため、早期発見に努め防除を行う。
- イ 本虫は薬剤に対する抵抗性を獲得しやすいため、系統の異なる薬剤とのローテーション（輪番）使用を心がける。
- ウ 一部地域の個体群でジアミド剤（IRAC：28）に対する感受性の低下が確認されたため、散布後に防除効果の低下が見られる場合は使用を控える。

白ネギ（中山間地）

1 ベと病

（1）予報内容

発生面積：やや少ない

発生量：やや少ない

（2）予報根拠

ア 6月中旬の巡回調査では、発生は確認されず、発生圃場率、平均発病株率はともに平年より低かった。

発生圃場率：0%（平年：40.7%、前年：16.7%）

平均発病株率：0%（平年：11.3%、前年：8.0%）

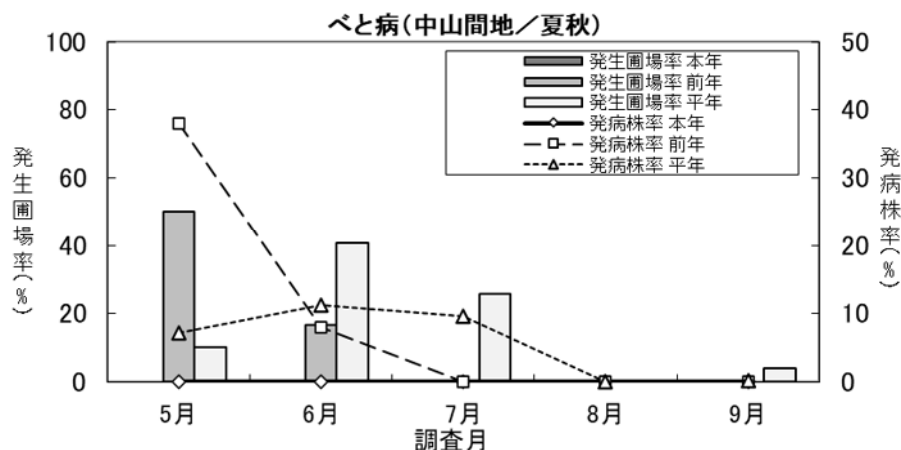
イ 本病は気温 13～20℃、多雨条件で発生が助長されるが、向こう 1 か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並 10%、高い確率 80%、降水量は、平年並 30%、多い確率 20%と予想されている（気象情報参照）。

（3）防除上注意すべき事項

ア 発病後の防除は効果が劣るため、気象情報を参考に発病前から防除を行う。

イ この時期の散布は、曇雨天日や朝夕を避け、できるだけ晴天日の日中に行う。

ウ 同一系統薬剤を連続使用しないようにし、他系統薬剤とのローテーション（輪番）使用を行う。



2 ネギアザミウマ（令和 7 年 7 月 1 日 病害虫防除技術情報 第 4 号発表）

（1）予報内容

発生面積：平年並

発生量：平年並

（2）予報根拠

ア 6月中旬の巡回調査では、発生圃場率は平年よりやや低く、平均被害度は平年より低かった。

発生圃場率：62.5%（平年：82.3%、前年：100 %）

平均被害度：2.2（平年：10.9、前年：17.3）

イ 本虫は高温乾燥条件で発生が助長されるが、向こう 1 か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並 10%、高い確率 80%、降水量は、少ない確率 50%、平年並 30%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

白ネギ（平坦地）の項参照

3 ネギハモグリバエ

(1) 予報内容

発生面積：やや少ない

発生量：やや少ない

(2) 予報根拠

ア 6月中旬の巡回調査では、発生圃場率、平均被害度ともに平年より低かった。

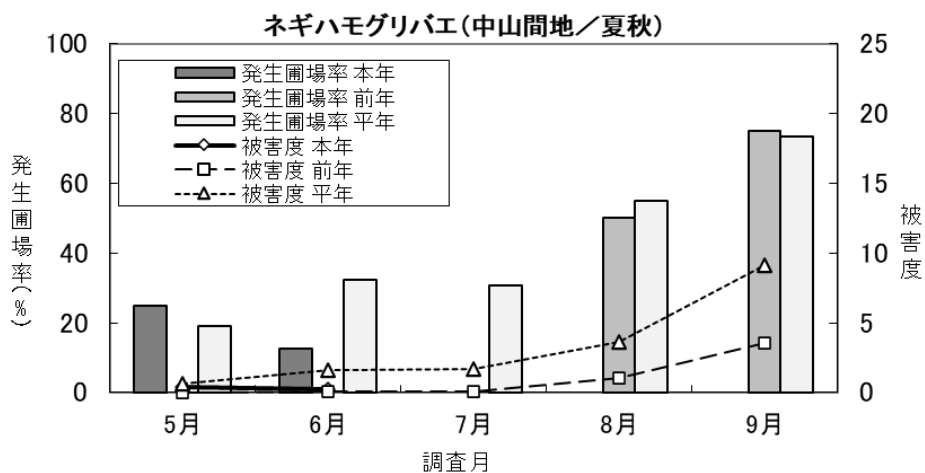
発生圃場率：12.5%（平年：32.2%、前年：0 %）

平均被害度：0.2（平年：1.6、前年：0.0）

イ 本虫は25℃前後で発生が助長されるが、向こう1か月の気象予報によれば、平均気温は、平年並10%、高い確率80%と予想されている（気象情報参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

白ネギ（平坦地）の項参照



※ 薬剤の詳細は大分県主要農作物病害虫及び雑草防除指導指針、又は各地区防除暦を参照する

気象台メモ

大分地方気象台

◎ 九州北部地方（山口県を含む）1か月予報（福岡管区気象台発表）

- ・ 発 表：令和7年6月19日（毎週木曜日に発表）
- ・ 予報期間：令和7年6月21日～令和7年7月20日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。平年に比べ曇りや雨の日が少ないでしょう。平均気温は、高い確率80%です。降水量は、少ない確率50%です。日照時間は、多い確率50%です。週別の気温は、1週目は、高い確率80%です。2週目は、高い確率70%です。3～4週目は、高い確率50%です。

【向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）】

要 素	予 報 対 象 地 域	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	九州北部地方（山口県を含む）	10	10	80
降 水 量	九州北部地方（山口県を含む）	50	30	20
日照時間	九州北部地方（山口県を含む）	20	30	50

◎ 九州北部地方（山口県を含む）3か月予報（福岡管区気象台発表）

- ・ 発 表：令和7年6月24日
- ・ 予報期間：令和7年7月～令和7年9月

【予想される向こう3か月の天候】

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

平均気温は、高い確率60%です。

7 月 期間の前半は、平年に比べ曇りや雨の日が少ないでしょう。期間の後半は、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。気温は、高い確率50%です。

8 月 平年と同様に晴れの日が多いでしょう。気温は、高い確率50%です。

9 月 天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は、高い確率50%です。

【向こう3か月の気温、降水量の各階級】

3か月	気温：高い	降水量：ほぼ平年並
7月	気温：高い	降水量：ほぼ平年並
8月	気温：高い	降水量：ほぼ平年並
9月	気温：高い	降水量：ほぼ平年並

【向こう3か月の気温の各階級の確率（%）】

気 温	予 報 対 象 地 域	低い	平年並	高い
3か月	九州北部地方（山口県を含む）	10	30	60
7月	九州北部地方（山口県を含む）	20	30	50
8月	九州北部地方（山口県を含む）	20	30	50
9月	九州北部地方（山口県を含む）	20	30	50

【向こう3か月の降水量の各階級の確率（%）】

降 水 量	予 報 対 象 地 域	少ない	平年並	多い
3か月	九州北部地方（山口県を含む）	30	40	30
7月	九州北部地方（山口県を含む）	40	30	30
8月	九州北部地方（山口県を含む）	30	30	40
9月	九州北部地方（山口県を含む）	30	30	40

◎ 最近1か月の天候経過（令和7年5月下旬から令和7年6月中旬の天候）

5月下旬

天気は、高気圧に覆われて晴れる日もあったが、低気圧や前線、気圧の谷や湿った空気の影響で曇りや雨の日が多く、大雨となった日もあった。気温は、玖珠で平年よりかなり低く、蒲江で平年並、他は低かった。降水量は、杵築、武蔵、宇目で平年よりかなり多く、他は多かった。日照時間は、豊後高田で平年よりかなり少なく、他は少なかった。

※大分市の旬平均気温は19.6℃で平年より低かった。旬降水量は103.5ミリで平年より多かった。旬日照時間は49.7時間で平年より少なかった。

6月上旬

天気は、高気圧に覆われて晴れる日もあったが、低気圧や梅雨前線、気圧の谷や湿った空気の影響で曇りや雨の日が多く、期間の終わりは大雨となった所もあった。九州北部地方（山口県を含む）は、8日ごろに梅雨入りしたと見られる。気温は、国見、玖珠で平年よりかなり低く、他は平年並か、低かった。降水量は、佐伯、宇目、蒲江で平年並、他は平年より多いか、かなり多かった。日照時間は、宇目で平年より多く、他は平年並か、少なかった。

※大分市の旬平均気温は21.3℃で平年並だった。旬降水量は109.5ミリで平年より多かった。旬日照時間は45.1時間で平年より少なかった。

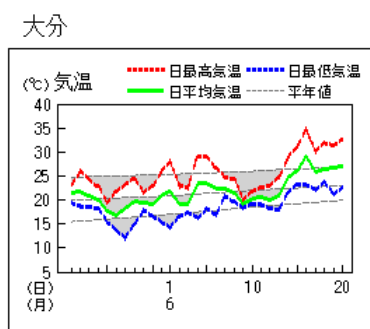
6月中旬（高温）

天気は、前半は梅雨前線や湿った空気の影響で曇りや雨の日が多く、後半は高気圧に覆われて晴れる日があった。気温は、中津、武蔵で平年より高く、他はかなり高かった（高温）。降水量は、平年並か、平年より少なかった。日照時間は、中津で平年より多く、他は平年並だった。

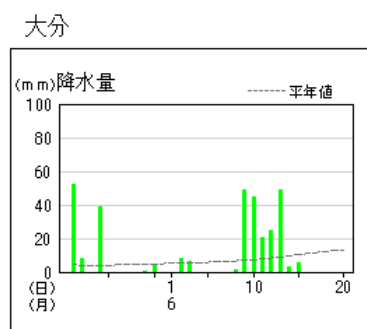
16日は武蔵、玖珠、湯布院で「日最大瞬間風速」の6月の1位の値を更新した。

※大分市の旬平均気温は24.8℃で平年よりかなり高かった。旬降水量は102.5ミリで平年並だった。旬日照時間は50.5時間で平年並だった。

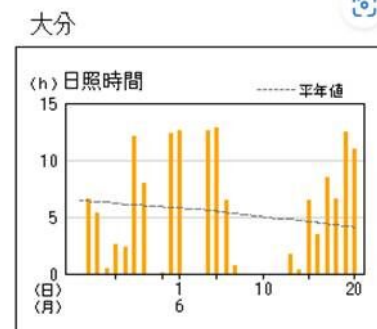
地上気象 気象経過図：2025年05月21日～2025年06月20日



地上気象 気象経過図：2025年05月21日～2025年06月20日



地上気象 気象経過図：2025年05月21日～2025年06月20日



地上気象 気象経過図：2025年5月21日～2025年6月20日

<https://www.pref.oita.jp/site/oita-boujosho/>

または



病虫害対策チーム

検索

【病虫害発生予察情報作成機関】

農業研究部

病虫害対策チーム

葉根菜類・茶業チーム

果樹グループ

花きグループ

地域農業振興課

安全農業班

大分県農林水産研究指導センター

農業研究部 病虫害対策チーム

〒879-7111 大分県豊後大野市三重町赤嶺 2328-8

Tel. 0974-28-2078

Fax. 0974-22-0940

大分県農林水産部地域農業振興課 安全農業班

〒870-8501 大分県大分市大手町 3-1-1

Tel. 097-506-3661

農薬は正しく安全に使いましょう!!